

「日本におけるイスラム理解の促進」講演会シリーズ
第1回：日本におけるイスラム～共生のための課題～

日時：2019年6月21日（金）17：00～18：30

会場：笹川平和財団ビル 11階国際会議場

講演者：店田廣文氏

（司会） 皆様、本日はご来場いただきまして、誠にありがとうございます。ただ今より笹川平和財団主催、「日本におけるイスラム理解の促進」講演会シリーズ第1回「日本におけるイスラム～共生のための課題～」を開会いたします。私は、本日の司会を務めさせていただきます、笹川平和財団の田中と申します。

本講演会シリーズは、ニュースなどを通じて耳にすることの多いイスラムに焦点を当て、そのさまざまな側面をテーマに講演会を開催することで、イスラムについての理解を図ることを目的としております。

日本では近年、メディアなどを通じて「イスラム」という言葉を目にする機会が増えました。しかし、イスラムと聞いても漠然としたイメージを持つ人は多いものの、具体的にどのような考えや文化、風習を持っているのか、また、メディアで報じられているような事象の背景にはどのような歴史や思想があるのかについて、正しく理解している人は多くはありません。しかし、近年の外国人観光客や外国人労働者の増加に加え、東京オリンピック・パラリンピックを控え、日本でも市民レベルでイスラム教徒—ムスリムに接する機会が増えていきます。

そのような状況の中で日本人とムスリムを含む外国人が共生できる社会を築くためには、ムスリムに関する知識と正しい理解が必要となります。そのために、本講演会シリーズでは専門家の方々を講師としてお迎えし、皆様にイメージから一歩踏み込んでイスラムについての理解を深めていただけるよう、テーマ別に全4回の講演会を行っていきます。

本日第1回は、早稲田大学教授の店田廣文先生を講師としてお招きしております。店田先生は、社会学、アジア社会論、エジプト地域研究を専門にされていらっしゃるほか、モスク代表者会議を主催されております。本日は店田先生に「日本におけるイスラム～共生のための課題～」を主題としてご講演いただきます。ご講演の後には質疑応答の機会を設けておりますので、奮ってご質問ください。また、お手元にアンケートもお配りしておりますので、ご協力のほどよろしく願いいたします。

それでは、店田先生、どうぞよろしく願いいたします。皆様、拍手でお迎えください。
（拍手）

■講演：日本におけるイスラム～共生のための課題～

店田 廣文 氏（早稲田大学 教授）

こんにちは。早稲田大学の店田と申します。よろしくお願いいたします。

今日は、「日本におけるイスラム～共生のための課題～」ということでお話をさせていただきます。本講では、まず前半部で日本におけるイスラム社会の発展あるいは活動といった現状を紹介いたしまして、後半のほうでイスラム教徒、あるいはイスラム団体と地方自治体、あるいは地域住民との関係等についてお話をしていきたいと考えております。調査事例や現状のいろいろな調査で我々が把握したことを使いながら、共生のための課題を考えていきたいというふうに思っております。

目次は、お手元のレジュメにも書きましたように、一応 6 つのパートに分けてお話をしていきます。3 番までのところで日本のイスラム社会についての現状等について、4 番目以降で共生ということに関していろいろ考えていきたいと考えております。

日本社会のイスラムへの関心、これは皆さんもよくご存じのところかと思えますけれども、イスラム教徒——ここでは「ムスリム」というふうな形で以降呼びますけれども、その人口集団が日本に現れたのが大体 19 世紀の末ぐらいだというふうにいわれています。戦前の 1930 年代から 1940 年代にかけても日本はイスラムに対して非常に強い関心を持っていた時期がありました。戦後にはオイルショックあるいは湾岸戦争、あるいは 9.11 や IS といった、中東をはじめイスラムに対する関心が非常に強くなった時期もありましたが、上下があったという感じでもありました。ただ、最近はハラール認証であるとか、あるいは訪日のムスリム観光客が増加していることもあって、イスラムへの関心は継続的にあるのかなというふうなところが現状かと思えます。

ムスリムは世界的な存在であるというのは皆さんもよくご承知されているとおりで、2017 年現在の推計によると、約 18 億人がイスラム教徒であるというふうに考えております。世界人口の 24% ですので、人口の 4 人に 1 人はイスラム教徒であるというところかと思えます。200 以上の国や地域にイスラム教徒は住んでいて、ただ、私たち日本に近いアジア太平洋といった地域に 6 割が住んでいて、身近なところにたくさんイスラム教徒が住んでいる、ムスリムが住んでいるというのが現状です。

ムスリム人口の分布を地図で見えますと、このようにアジア・アフリカに非常に大きな円がありますけれども、例えばこの青い円、インドとか中国あるいはロシアといったところにも非常に大きなイスラム教徒の人口がいるということがわかります。あまりイスラム社会というふうに我々は考えていないところですが、こういったところにもイスラム教徒がたくさんいますし、あるいは赤い円で囲んだ欧州や北米といった、いわゆるムスリムマイノリティー社会といわれているようなところにも数百万単位でムスリムが住んでいると。このあたりは、特にヨーロッパについては近年の移民あるいは難民をめぐる問題で皆さんもよくご承知のところだろうと思えますが、このような形で本当に世界各地にイスラム

教徒——ムスリムが住んでいるとうことになります。

さて、日本のことに話を戻しますけれども、日本のイスラムの歴史というのを振り返ってみますと、確かに『日本書紀』等にペルシャやアラブといったことに関する記述があったり、あるいは江戸時代の『西洋紀聞』とか『采覧異言』といったところにもイスラム関連の記述というのはいろいろ出てきます。

しかし、実際にイスラムとの接触、あるいはムスリムとの接触が本格的に始まったのは幕末から明治にかけてのころだというふうに考えられます。遣欧使節団や留学生、あるいはマレーからマハラジャが来日したこともありましたが、1890年にはトルコから表敬訪問のために日本にやってきたトルコの軍艦「エルトゥール号」が帰国の途上で和歌山県沖で遭難したというのは、皆さんもご承知の方もいらっしゃるかと思いますが、こういった事件をきっかけにして、トルコに行った日本人の中からイスラム教徒——ムスリムになる人が現れたのが明治24年のことでした。

当時の日本のイスラム世界へのまなざしというのは、同じ立場、不平等条約とか、あるいはナショナリズムの興隆の時代にあって、同じ立場を体験しているイスラム諸国への関心ということであったわけですが、それが次第に変わってきます。特に日露戦争を境にして日本の国際的な地位が非常に高くなって、こういった変化が、イスラム諸国への関心というのを植民地統治への関心へと変容させていったというふうにいわれています。

一方、こうしていればアジアの大きな国——大国になった日本に対する関心をイスラム社会の人々は持ちまして、日露戦争後、20世紀の初めあたりになりますけれども、何人かの外国人ムスリムが日本にやって来ました。その中の1人のイブラヒムといわれる人は、当時の大隈重信であったり、あるいは伊藤博文といった政財界の要人といろいろ懇談をして、当時のイスラム社会の状況について議論したり、あるいは日本に対する期待を語ったりしたようです。彼は『ジャポニヤ』という日本紀行も残しております。

さて、このような状況があったわけですが、1930年代に、先ほどちょっと申した回教政策というのは、日本の帝国主義の時代にあって、対共産主義政策あるいは大陸への進出政策とも関わって、イスラム世界との連携を目指した時期がありました。この時期にとられた政策、それを回教政策あるいはイスラム政策というふうに呼んでいますけれども、この当時には国民に対する大規模な啓蒙活動も行われ、回教圏展覧会というのが行われて、その当時の情報によると150万人が来場したという、かなりの人がイスラムに関する展覧会にやって来たというふうなこともいわれています。

話がちょっと前後いたしますけれども、この当時には、ロシア革命後に朝鮮あるいは満洲を経て、難民としてタタール系のムスリムの人たちが流入してきております。数としては数百人規模なのですが、東京の市内にコミュニティをつくったり、あるいは回教学校を建設していたりしてございましたけれども、こうしたタタール系のムスリムの人たちも、30年代以降の回教政策への協力者として取り込まれたというときがございました。

30年代の日本のムスリム人口を見てみますと、神戸とかあるいは東京・名古屋といった

ところが中心ですけれども、1,000 人ぐらいだったのではないかというふうに考えられています。これが当時の新聞広告に出た展覧会の広報ですけれども、上野の松坂屋で展覧会が行われました。

さて、一気に時代は飛んでしまいますけれども、戦後から 80 年代の中期あたりまでのムスリム人口を見てみますと、終戦直後は、先ほどお話ししたタタール系ムスリムは離日したということもあって、残った外国人ムスリムと、戦中期に回教工作に関わって改宗した人、あるいは自ら改宗した人も含めて、日本人・外国人を合わせて数百人程度であったのではないかというふうに考えられています。その後、日本の復興と高度経済成長という時期も経て、外国人の流入もあって、60 年代の末には大体 3,000 人ちょっと、80 年代の半ばあたりには 8,000 人ぐらいに達していたのではないかというふうに考えられます。

こうした状況に大きな変化が起こったのがバブル経済期のことです。外国人労働者が 10 万人から 20 万人の規模で流入してきました。主にパキスタン、バングラデシュ、そしてイランといったイスラムの国々からやって来ました。彼らは首都圏や各地の工業地帯で働く労働者として働いていたわけですが、彼らが 10 万人から 20 万人規模ということで、後で申し述べますが、現在に匹敵するような数のイスラム教徒が日本には当時いたというふうに考えられます。

ただ、その後、査証相互免除協定が一時停止されたこともあって、その多くの労働者は帰国するということになりました。こちらのグラフに示しましたように、90 年代には非常に大きな数のイスラム教徒の人口が観察されたわけですが、2000 年にかけて徐々に減少していった、現在ではインドネシアを筆頭に、イラン、パキスタン、バングラデシュ、マレーシア、トルコといった国々の人が正規滞在の在留外国人として生活をしているというのが現在の姿になっております。

ここでは 2018 年、一番近い推計の数字を出しましたが、これ以前の 2010 年ごろの推計では、日本人ムスリム・外国人ムスリム合わせて大体 12 万から 13 万人、外国人が 10 万から 11 万、日本人が 1 万から 2 万の間というところで、2010 年には 12~13 万人のムスリム人口がいたというふうに推計しておりますけれども、2018 年の 6 月時点の統計を参照して推計してみますと、現在では合わせて 20 万人ぐらいのムスリムが日本には住んでいるのではないかと考えています。

国籍としてはインドネシアが一番多くて、あとはパキスタン、バングラデシュ、マレーシア、トルコ、イランといったところが上位に並んでいます。我々は、イスラムというと、すぐ中東とかアラブをイメージすることが多いのではないかと思います。アラブ人の場合には合わせても 6,000 人程度という形で、決して主流といいますか、上位を占めているわけではありません。一方、日本人が 4 万人ということですので、グラフで見ますとこのような形で、インドネシア・日本人というのが非常に大きな割合を占めているのが現在の日本のイスラム教徒人口——ムスリム人口の状況であるというふうに言うことができます。

外国人ムスリムの多くは、現在は正規滞在者として在留しておりますけれども、いろいろ

な資格を持って在留をしております。人文知識・国際業務といった、いわゆる会社、企業等で働いている人たち、あるいは留学や研究、技能実習、あるいは家族滞在というふうな人たち、それから、永住者や日本人の配偶者といった資格で、安定的な形で在留をしている人たちも非常に多くなってきていて、全体として見ると、非常に滞日状況が安定しているというふうなことを見て取ることができます。国籍にもよりますけれども、4割強は、ある意味で日本に定住しているムスリムではないかというふうに考えられます。このうち留学生は大体1割前後ぐらいで、地方の各地の大学等において研究に従事しているというふうなことも見て取ることができます。

都道府県別のムスリム状況についても簡単に見てみますと、一番多いのはやはり東京です。2万7,000人のムスリムが住んでいて、そのほか愛知、埼玉、神奈川、千葉、茨城、こういったところに1万人以上のムスリムが居住していると推計しています。少ないのは秋田、鳥取、あるいは青森、岩手、山形等の東北や中国地方の各県ですけれども、いずれにしても全都道府県にムスリムが居住していることは確認することができます。ただし、やはり大都市圏への集住が顕著で、関東、中京圏、関西に合わせて75%ですから、4分の3がこの地域に住んでいるというふうに考えられます。

以上のような歴史と人口の状況があったわけですが、では各地のイスラムのコミュニティがどのような形で発展してきたかというのを、モスクを中心にして簡単に見てみたいと思います。

戦前から1980年代までのモスクというのを見てみますと、日本で最初につくられたモスクは神戸モスクです。1935年、昭和10年のことになりますが、その後、名古屋、東京。代々木上原のところに現在は東京ジャーミイというのがありますけれども、その地に1938年に東京回教礼拝堂というのが回教政策にも関わりがあってつくられております。戦前にはこの3つのモスク——イスラムの礼拝所がつけられました。

戦後になりますと、大使館等の施設としてインドネシアとサウジアラビアがそれぞれ礼拝所をつくりましたが、このころまでにあったモスクは、名古屋は戦災で焼失しましたので、4カ所ということになります。神戸モスクは現在も観光名所として有名ですし、名古屋は残念ながら戦災で焼失しました。38年につくられた東京回教礼拝堂はこんな姿をしておりますけれども、現在は老朽化のために以前のは壊されて、この奥に見えるような立派なトルコ風のモスクが代々木上原につくられております。手前は、回教学校という、戦前にタタール系のムスリムがつくった回教学校の跡がここに2016年までは残っておりました。現在はイスラム文化センターとしてこういう建物がつくられて、モスクが主催するいろいろなイベントやイスラム講座等のために使われる施設となっております。

そして、このような90年代以前までの状況が一変するのが90年代以降です。先ほどのバブル期の大量のムスリム労働者の流入というのにも関係がありますけれども、そうしたニューカマーの人たちのうち、そのまま日本に残る人たちもいたわけですが、そうした人たちの

中から自分たちのモスク活動、自分たちの異境の地での生活のセンターをつくる、あるいは集まりの場、あるいはもちろん祈りの場をつくるということで、自分たちでお金を集めてモスクをつくるというふうな活動が始まりました。

その最初の成果が埼玉県春日部になりますけれども、一ノ割モスクというのがつくられました。この一ノ割モスクがつくられたことが各地のモスク設立の機運を一気に高めて、2000年代には全国的なモスク建設ブームになりました。これは一ノ割モスクですが、元学習塾の建物をちょっと改装して、ゲートの辺りを少しイスラム風に変えているというところが見えます。また、全体をちょっと緑色っぽいイスラムの色に変えているというふうなところがあります。

さらに、名古屋では4階建てのビルが新たに建築されて、名古屋モスクとして開設されましたし、東京都豊島区の大塚では印刷会社のビルを買い取って、そこをモスクとして改装して、このような形で現在も活動しております。さらに、富山県の射水市には主に中古車業で成功した人たちがたくさんいるわけですが、そういう人たちが中心となって、コンビニを買い取ってモスクにした富山モスクというのが99年に開設されております。

このような形で、自分たちのお金で資金を集めてモスクをつくるというのが最初のころのスタイルであったわけですが、徐々にこういったモスク建設のパターンが変わってきます。それはインターネットの普及、あるいは各地にイスラムのコミュニティができたというふうなこともあって、国の内外からさまざま形で支援を受けながらモスクをつくっていくというふうなパターンの建設が日本各地で見られるようになりました。それによって、このグラフに見ますように、90年代の末から2010年にかけて一気に全国に50以上のモスクが建設されました。その後もモスクの建設は続いていて、2017年には100カ所を超えたというふうに考えられます。

2000年以降にできたモスク、新城であるとか、あるいは各務原では、これはカラオケボックスだったというところなのですが、それを改装してモスクになっていますし、埼玉県の所沢では一戸建てを改装して、こういう外壁を塗り替えてモスクとして開設しております。あるいは茨城県では工場の2階部分をモスクとして開設しているというところもありますし、さらに2000年代の後半あたりになると、留学生がモスク建設の主流になるパターンというのも幾つかありまして、その1つとして、これは東北大学の留学生が中心となって、それまでに積み立ててきたお金、それから国内外の寄付、そういうものを使って仙台にこのような形のモスクを新たに建築しております。

それから、岐阜には田園地帯の中ですが、これもかなり立派なモスクが、これも国内外の寄付を集めてつくったといわれております。さらに九州でも、福岡に九州大学の留学生が長年積み立ててきたお金プラス海外からの多額の寄付金というものも使って、こういうふうな立派なモスクが九州大学のキャンパスの近くにつくられました。この建築自体は日本人の建築士が設計して、地域の景観になじむような形にしたいということでこのようなものになったというふうに聞いております。

このように、全国に地図で見ますと、北海道から沖縄までモスクが 100 カ所以上あるのが現状なのですけれども、まだこの白い部分にはモスクがない県が幾つかあります。しかし、そういったところでも恒久的なモスクとは別に一時的な礼拝所というのがあるのですが、それが活動していることを見て取ることもできます。これは東京の新大久保にある一時的な小規模礼拝所ですけれども、このような形で、マンションの一室にじゅうたんを敷き詰めて礼拝のスペースをつくるというふうな、こういった小規模の礼拝所が全国に存在していると考えられます。

また、そういったものの一つの例で、宮崎にはモスクはないのですけれども、宮崎大学の構内にイスラーム文化研究交流棟という施設が大学によってつくられていて、ここが実質的には礼拝のためのスペースとなっています。金曜日の集団礼拝のときには、このときも 50 人以上の人が集まっていたけれども、留学生だけではなくて、宮崎市内の一般のイスラーム教徒——ムスリムの人もやって来て一緒に礼拝をしている姿がありました。

また北九州にも、北九州市内には現在のところモスクはないのですけれども、九州工業大学の集会室ではこのような形で礼拝が行われていたり、あるいは秋田県にもモスクはありませんけれども、秋田大学の近くのビルの一室にこういう形で一時的な礼拝所がつけられて礼拝が行われているという様子を見ることができました。

このように見ていきますと、イスラームコミュニティの発展段階を改めてまとめてみますと、宗教的な基盤の整備というのは、何しろ北海道から沖縄まで既に 100 カ所以上、一時的な礼拝所も多数存在しているし、それに合わせて 20 万人以上のムスリム人口が各地に居住しているというのが実態になっております。そのうち定住ムスリムといわれる人たちは 4 割から 5 割ぐらいではないかと。

ではどんな仕事をしているかというのを私たちがやった調査で見ますと、自営業であるとか、あるいは専門職や技術職といった結構安定した職業で働いている人が結構多いのではないかと考えられます。経済的にも安定していて、中間層ぐらいの人たちが多いというのが私どもの調査結果からの印象です。

このような形で全国につくられたイスラームコミュニティですけれども、そこではいろいろな活動が行われています。やはりモスクが活動の拠点になっていて、当然ながら宗教的な活動が一つの中心としてありますけれども、そのほか日常生活に関わる相互扶助、情報交換であったり、あるいはライフイベントとして重要な婚姻や葬儀の場としてもモスクは使われていたり、教育や勉強会の場であったり。また、学校建設——イスラーム学校というのはまだ現在のところきちんとしたものはつくられておりませんが、そういったものをつくらうというふうな運動の拠点となっていたり、あるいはイスラーム霊園の建設活動の拠点となっているというふうなところもあります。

さらに最近では、ハラール食品の確保ということだけではなくて、最初に述べました、訪日ムスリム観光客、あるいはインバウンドとも関わりますけれども、ハラール認証活動にもこのモスクが拠点となって活動しているというところもあります。

それから、最後には「地域社会との関係構築」と書きましたが、これはまた後ほど別の形でお話ししていきたいと思います。

このようにいろいろな形の活動が行われているのですが、全てをここで取り上げることはせずに、教育の問題を簡単に見ていきますと、やはり子供のイスラム教育がムスリムの親にとってはかなり重要な問題です。給食の問題、あるいは日本における共学に関わるいろいろな問題があったりしますし、校内での礼拝のことであるとか、そういったことも教育に関わって出てきたりしますけれども、そういうことについてもモスクを通じていろいろ交渉したりということもあったりします。

また、これはムスリムに限ることではありませんけれども、子供たちの悩み、例えばいじめの問題とか、そういったことについてのケアをする場としてもモスクが機能しているということも見て取ることができます。これは行徳モスクの子供教育の様子ですけれども、こういった小さな子供たちが、「ハディース」といわれる預言者の言行録の一部を塗り絵教材を使って勉強しているというところです。

それから、イスラムにとってはアラビア語というのが非常に重要な言語ですけれども、ここでは子供たちだけではなくて、日本人の親御さんも一緒にアラビア語の勉強をしているという様子を見ることもできます。

もう一つ、霊園の問題をここではちょっと簡単に取り上げますがけれども、滞日ムスリムの人たちも当然、我々一般の日本人と同じように高齢化という問題を抱えるような時期に差し掛かってきています。また、人口増加によって将来的には多くの埋葬が必要となりますけれども、イスラムの場合、土葬が前提ということで、なかなか簡単に霊園をつくるというふうなことにはならないというのが一つの問題としてありました。実際に計画はあったけれども、地域住民の反対で中止になったというふうな例もあつたりします。

現在のところ、山梨、北海道、静岡、茨城、和歌山というところに霊園はあり、さらに九州圏でも計画が進んでいると聞いております。これは甲州市の日本ムスリム協会という団体の持っている霊園ですし、清水イスラーム霊園では、こういう形で埋葬の場所の整備が着々と進んでいるということを見ることができました。

以上、簡単に見てきましたように、イスラムコミュニティの展開あるいは活動というのがあるわけですがけれども、最初のイスラムコミュニティのモスク建設から既に30年近くが経過しております。そのほかのところも20年以上が経過しているようなところが多々出てきているわけで、モスクによっては老朽化に伴って建て替えとか移転という話を聞いたりもいたします。

そういう中で、いずれにしても今後イスラムコミュニティをどう継続的に運営していくかという転換期でもありますし、また、日本で暮らすムスリムが増えてきています。先ほど20万という数字を出しましたがけれども、今後も恐らく入管政策の今年4月以降の変化によって、さらにイスラム教徒が増えていく可能性というのものもあるのではないかと考えておりますけれども、今後も日本に暮らすムスリムは増加していくことが考えられます。

3番目としては、地域社会との交流、一方ではあつれきといったことも起こったりしております。特にモスク建設反対という動きが幾つかの地域で起こったことにもそれは見て取ることができますが、やはり地域の中に孤立して存在しているということではありませんので、いろいろな意味で交流もあればあつれきもあるというのがいろいろな地域で見られるようになってきています。

そういう中で、これらの課題に対しての取組として、一つは、団体の法人化というのがかなり進んでいるというのが現状です。それから、2番目の日本で暮らすムスリムの増加に対しては、日本におけるイスラムをどのように考えていけばいいのか。そういう中で、今後の中心となる日本人ムスリムや次世代の若いムスリムをどのように育てていくのかというのがまた課題になっています。

ここでは1番目の団体の組織化・法人化について簡単にお話ししますと、法人化することの意義というのは、1つには経済的な利点ということもあります。非課税になるとか、あるいは税制優遇が受けられるとか、永続性が確保できる、あるいは宗教法人になることによって団体としての社会的な信用が得られるということもあります。これは国内だけではなくて、外国の機関や政府に対してもそうですし、地域への窓口として、正式の宗教法人となっているということが一つの大きな利点になっているということもあります。こうして法人化して、組織化された団体になることによって、活動の内容が明確に示されたり、あるいは公的な活動を団体として展開していくベースになるとか、いろいろなことが法人化あるいは組織化に伴って生じてきています。

宗教法人は、実際に数えてみますと既に20以上になっていて、中には支部をたくさん持っている団体もあって、そういった支部を含めると、既に40以上のモスクを拠点とした団体が宗教法人化しているというのが現状です。

その登記簿を見てみますと、単に宗教法人としてのいわゆる教義を広めるとか、あるいは宗教的な行事を行うといった目的だけではなくて、イスラムの文化の紹介であるとか、あるいは異文化交流であるとか、日本人との関係構築といったところも書かれていたりして、そういったところについても考えながら法人化・組織化が行われているということが見えてきます。

また宗教法人だけではなくて、宗教法人にするにはいろいろ手続き的に大変だということもあつたりして、それよりも簡単にできるといいますか、法人化がスムーズに進められる一般社団法人になっている団体も20近くありまして、こちらのほうでもその団体の目的として、イスラム文化の紹介であったり異文化交流ということが掲げられているというのを確認することができます。

このような法人化の進行を数で見ても既に60以上、100カ所近いモスクがあるわけですが、半数以上のところが法人化をしているということで、日本社会の制度に多くは根付きつつあるということを見て取ることができます。

それから、2番目の取組に関連して、持続的な発展を可能にするための担い手として、日本人のムスリムであるとか次世代のムスリムを育てることが非常に重要になってきているわけですが、同時に、この取組というのは日本社会にイスラムコミュニティを根付かせるということも一つの大きな目的になっているかと思います。そういう中で、日本人ムスリムを中心に、あるいは日本語というものを中心にした運営に徐々にコミュニティの在り方を変えていこうというところを考えているというのいろいろな語りの中から見て取ることができます。

以上、ちょっと時間がかかってしまいましたけれども、イスラムコミュニティの現状というのを見てみました。ここからは、時間の許す限り共生に関してのお話をしていきたいと思いますが、まず地方自治体についてです。イスラム認識についてどうかということを中心に簡単にお話しいたします。

私どもの研究室で、全国95の自治体にモスクが所在していると考えているわけですが、この95の地方自治体を対象にしてアンケート調査を行いました。73の地方自治体からご回答を頂いた結果ですが、これらの団体では、当然ながら多文化共生のいろいろな取組が行われています。

では、イスラムあるいはムスリムについてどうなのかということをお簡単なデータだけ紹介しますと、まずモスクがあることをわかっているのかどうか。「情報がある」というふうに答えてくれたのは7割ぐらいで、「全く把握していない」という自治体も3割ありました。

では、「モスクに行ったことはありますか」と聞くと、「訪問したことがある」、あるいは「訪問予定」というのは20数パーセント。そして、「モスクとの連絡はありますか」ということを聞くと、やはりこれも20数パーセントということで、「連絡したことはない」、あるいは「訪問する予定はない」というふうな団体、地方自治体が7割近くというのが現状でした。確かにモスクがあることはわかっているのだけれども、訪問経験あるいは連絡があるのは2割弱ぐらいであるということが現状でした。

ムスリムに配慮した施策を実施している自治体も幾つかあります。このあたりについてはまた時間があれば後ほどお話ししたいと思いますけれども、数だけで見ると、イスラムあるいはムスリムとの関係性というのがたくさんあるという状況には決してないのが地方自治体の調査から見えてきたところの1つです。

一方、話は変わって、モスク周辺に住んでいる日本人住民がイスラムあるいはムスリムに対してどのような認識を持っているのかということも私どもは調査いたしました。地域関係構築というのがイスラムコミュニティにとっては一つの課題なのですけれども、そのいわば対象となる日本人住民がイスラムに対してどんな認識を持っているのかというのを探りました。

調査は、岐阜、富山、福岡で行いましたが、福岡のデータだけを今回は紹介いたします。

326名の方から回答を得ました。この調査の中でイスラム・ムスリムに対してどんなイメージを持っているか自由に答えていただきました。そうしますと、例えば「排他的」であるとか「過激」であるとか、「怖い」とか「危険」であるとか「戦争」とか、あるいは「メッカ」、「アラブ」といったところであるとか、「近寄り難い」とか「一夫多妻」であるとか、こういったところがいろいろイメージとしては挙がってきました。

総体として見ると、やはりネガティブなイメージというのが中心で、自分自身で体験して持ったイメージというよりも、メディアやいろいろな媒体を通じていわば得られたイメージというのがここで出てきているような感じがいたしました。

一方で、別の質問では、「ムスリムとうまく付き合えますか」、あるいは「ムスリムが入ってくることにどう思いますか」という質問を外国人と比較しながら調査をしてみました。そうしますと、「ムスリムとうまく付き合えますか」という質問については、4分の1の人が「付き合えると思う」ということであつたわけですが、それでも、「ムスリムが入ってくることにどう思いますか」と聞きますと、10%未満の人が「賛成」と答えてくれたのですけれども、外国人一般とはかなり大きな差があるという状況が見て取れました。

また、調査の中で「ムスリムの知人はあるのですか」と聞いてみますと、若い人は1割以上の方が「いる」と答えてくれました。あるいは男性よりも女性のほうが多かったりもしましたが、総体として見ると、決して多くないというのが全体的な状況でした。

そのほかいろいろ調査の中では聞いているのですけれども、調査結果が示唆するものとしてまとめますと、近所にイスラムあるいはムスリムがいるのだけれども、どうもその実像がうまく見えていない、逆にムスリムにとっては、自分たちのありのままの姿が伝わっていないというふうな状況がこういった調査結果からは見えてきました。

そういったこともあって、特にムスリム側からはいろいろ地域の状況を変えたいということで、関係構築のいろいろな試みが行われたりしています。ここに書いたようなことであつたり、あるいは東日本大震災のときには、予定して行っていた活動ではありませんけれども、地域との関係構築が一気に進んだというふうなところもあつたようです。

こうしたムスリムからの働き掛けが一方であるのに対して、これは大塚モスクの例ですが、日本から、あるいは日本の地域社会の側からはどうなのかというふうに見てみますと、全体としてはあまり活発とは言えそうもないと。国際交流協会などが料理の講習会だつたり、あるいは交流会を行うというふうなことはやっていたりしますが、どうも総じてイスラムへの関心は薄い、あまり関わらないというふうな状況が見えてきました。これを変えていくためには、自治会であつたり、住民を巻き込んだ新たな取組が必要なのかなということなのです。

6番目に、では日本人はムスリムと共生できるのかということで最後にお話をしていきたいと思いますが、まずこれを考える前段として、ムスリムは決して一枚岩ではないということを改めて確認、あるいは改めて知っておくということも必要だということなのです。

先ほど外国人ムスリムの国籍をいろいろ挙げましたけれども、国籍を見ても多様であるというのはもちろんなのですが、国籍だけに限らず、イスラムとの向き合い方が人によってさまざまであるというふうなこともありますし、では日本にいて将来の日本のイスラムの在り方をどう考えているのかという、そういった点でも考え方はさまざまであると。

ここにはいろいろ細かな文章を提示しましたけれども、人によっていろいろなことが言われています。細かくは今取り上げませんが、こういったところもあって、日本には多様な外国人ムスリムが住んでいると。もちろん国籍も違う、民族・人種・言語も、あるいは場合によっては宗派や運動などもあって、非常に多様な外国人ムスリムが住んでいるということも知っておく必要があります。

一方で、そうは言っても、地域の中で普通に生活をしているイスラム教徒の人たち——ムスリムがいるというのもまた一方の真実で、生活満足度が高く、経済的には中間層である、あるいは家族の有り様を見ると、子供が2人以上いて、日本人の友人もいるし、町内会やPTAにも入って活動していますよ、という人も少なくないというのも一方の事実であるわけです。

一方、ムスリムというと、日本人のことを忘れがちなのですが、日本人ムスリムも、先に述べましたように4万人いて、非常にたくさんムスリムが日本には住んでいます。結婚を契機に入信した人がかなり多くを占めますけれども、それ以上に多くなっているのが第2世代の若いムスリムの人たちです。彼らは外国にルーツを持った若者もたくさんいますけれども、恐らく2万5,000人以上を超えているのではないかということで、若いムスリムの存在というのも忘れてはならないところです。

こういったさまざまなイスラムとの向き合い方を持っている、あるいは日本のイスラムの将来についていろいろな考え方を持っている人たちのことも前提としながらですけれども、一つの日本のイスラムの将来の理想的な姿をこれまでのムスリムの語りから見てみますと、将来的には、やはり日本語でイスラムを伝えられるような環境が欲しいとか、あるいは日本人が中心的な役割を担ってイスラムコミュニティを運営していきたいとか、あるいは日本社会が受け入れやすいコミュニティの在り方というのを確立していきたい、というところが見えてきます。

そういうことを前提としてなのですけれども、これはちょっとわかりにくくて、まだきれいな形で図ができてないのですけれども、イスラムとの向き合い方、あるいは日本のイスラムの将来をどう考えるのかという2つの軸を使って、いろいろなアイデンティティーを持ったイスラム教徒——ムスリムの人々が日本にはいるというのを、これは仮説的なものですが、考えてみました。

例えば右上の人、ちょっとわかりづらいのですが、例えばこの人たちは、日本のイスラムの理想的な姿、先ほど申し上げたような、日本人を中心に日本語で、というふうなところが中心となる、日本のイスラムを良しとしながら、コミュニティとしては日本の地域社会との関係構築を進めていきたい、というふうに考える人たちがここにいるだろうと。

しかし一方で、こちらの左下には、自分たちの元々のイスラムを維持していきたい、日本社会との関係構築にはあまり関心はないよ、というふうな人たちがやはりいるだろうというのがこの「私的な信仰」と書いたところです。

さらに、これと同じような、自分たちの元々のイスラムを大事にしたいと考えるのだけでも、日本に住んでいるのだから、コミュニティとして日本社会との関係もつくっていくよ、という人たちもいます。ここでは「よそよそしい共存」というふうに書きましたけれども、決して交じり合うわけではないけれども、仲良く共存するというふうなスタンスでしょうか、そういった感じの人たち。

もう一つ、ここに「緩やかな共生」と書きましたけれども、こういう人たちは、日本のイスラムの将来像というのを、日本人が主導していくようなイスラムの在り方を良しとするけれども、あまり積極的に組織に参加して地域社会と関わろうとはしないと。ただ、先ほどの生活調査の結果としてちょっと申し上げましたけれども、自治会やPTAには入って、何となく地域で隣人としてうまく共生しているというふうな人たちもいるだろうと。

こういう4つのタイプ。4つのタイプにももちろん分けられるわけではないですし、これ以上のいろいろなタイプのムスリムがいるということも当然あるわけですが、取りあえずわかりやすい形でこういうものを考えてみました。

こういったことがあるということ、まずイスラムの多様な姿、共生に対するスタンス、あるいは日本のイスラムの将来に対する考え方、そういういろいろ多様な人たちが存在しているということを前提としてですけれども、以上を踏まえて取りあえずまとめてみますと、ムスリムの人口というのはこれからも増えていくと思われれます。特定技能といった新たな入管政策ということの影響も大いにあり得ますし、第2世代が増加していくということもあると思います。

それから、コミュニティの中心であるモスクも増えていく可能性が高いと思います。今回取り上げたモスクはほとんどスンニ派のモスクでしたけれども、シーア派のモスク、あるいはイスラム新宗教と呼ばれているようなアフマディーヤのモスクなどもあったりして、既に105を超えていることは確実ですし、そのほか建設計画もあったりします。

そして3番目には、日本のイスラムに対する考え、あるいはライフスタイルの多様な日本人もいますし、外国人のムスリムもいるということもしっかり頭に置いておく必要があるだろうということです。

それを前提としてですけれども、ムスリムとの共生を考えるために、私どものグループではいろいろな会議をやったり、あるいは調査をやったり、こういうことも一つの共生のための手掛かりになるようなことをいろいろな形で見つけようとしてきた活動かなと今改めて思っております。

そういう中で、例えばこういう形で会議をやったり、そして、そういう会議の中では、普段聞けないようなこういったお話も出てきたりして、一般の日本人とイスラム教徒の人が

いわば腹を割って話し合うといえますか、そういうことが実際にこういう会議の場で行われたりしてきました。

そういうことを踏まえながらですけれども、ムスリムとの共生のための実践といっても、これで何かすぐ成果が出るなどということはもちろん考えられませんけれども、まず関心を持って関係をつくるというところから始めるのがやはり必要かなというのが結論のような、結論でないような、そういうお話になります。

地方自治体では、先ほどお話ししましたように、あまりモスク訪問というのが十分には行われていない。まずはモスク訪問というところから始めて、第一歩を踏み出すというのが地方自治体にとっては必要でしょうし、もちろんそういうものを既に進めているというところにとっては、さらにその先の関係づくりからイベント等の施策におけるムスリムとの関わりというのを進めていくことになるかと思います。

そして地域住民にとっては、やはり関係構築がイスラム教徒の側——ムスリムの側からはかなり頻繁に行われているわけですが、どうも地域社会の側からは、あまり関心がない、参加者が少ないというふうなところがあるようなのですけれども、まずはモスクのイベント等に参加するような形で第一歩を踏み出すようなところも必要かなと思います。

そういうことが考えられますけれども、日本人住民全体あるいは日本人全体として広く考えた場合には、まず関心をつくる、持ってもらう、そこがやはり必要なところだろうという、ごく平凡な結論になってしまいますけれども、そのためには、我々がやったようなモスク会議とは言いませんけれども、そういった集まりとか、あるいは日本・イスラム交流イベントというふうなイベントやフェアであったり。東京ジャーミイは今もうほとんど観光地化しているようなところもあって、時々観光バスでやって来るような人たちもいるようなのですけれども、そういった宗教施設が果たす役割もあるでしょうし、また、メディアであったり、あるいは我々研究者の立場の者が行う調査研究であったり、あるいは SNS であったり、いろいろな形でイスラムやムスリムに関する情報を発信していくということがまずは必要かなと思います。

こういうきっかけをつくる、あるいは出会う場を用意するというふうなところがまずは日本人全体のイスラムへの関心、あるいはムスリムへの関心を醸成する上では必要なところだろうと思います。いずれにしても、ムスリムと会ったことがない人、あるいは話したことがない人、そういう人はどうしても間違ったイスラムのイメージ、あるいはムスリムのイメージを抱きがちですし、あるいは無知や無関心というのが偏見や差別であったり、場合によっては恐怖を引き起こすということもいわれたりします。そういったことを踏まえて、まずは関心を持ってもらう、そして関係をつくってもらう、そして望むらくは、かなり時間はかかると思いますが共生への道というのが見えてくればと思います。

あるイスラム教徒の人は、「日本にイスラムが定着するにはまだ 200 年とか 300 年かかるのではないか」というふうに言うておりましたけれども、将来的にご近所にモスクがあるとか、あるいはご近所のモスクでイスラム教徒が礼拝している、ムスリムの人が礼拝している

というのが当たり前のように来る時代が来るのか来ないのか、そのあたりは何ともわかりませんが、まずは関心を持ってもらう、そして関係をつくるようないろいろなきっかけ、仕組みをつくっていくということから始めていくのが必要ではないかというふうなところで、私の結論と取りあえずのまとめとしたいと思います。

後ほどの時間では皆様方のほうからいろいろなコメント、あるいは、そうじゃないとか、私の言っていることは違っているとか、いろいろご意見もあるかと思しますので、そういった忌憚のないご意見を頂ければというふうに思います。

私のお話は以上です。どうもありがとうございました。(拍手)

■質疑応答

(A氏)

お伺いしたいのは、ハラール性についてなのですが、私、昔、エジプトとかにいて、その当時はハラール認証もなく、いわば全てがハラールであった。みんな何も気にしていなかったような気がしているのですが、今は日本でも、マレーシアとかインドネシアを中心にハラール認証というのをすごく働き掛けていますし、日本国内でも観光客を対象にするような形で、ハラール認証を取ったレストランとか食堂がすごく増えていると思うのですが、それをあまり強調し過ぎるのはどうなのかという気もするのです。

例えば先ほど先生のスライドで、学校の中で、ムスリムの生徒たちが行けば一緒に給食を食べられないとか、弁当を持ってこないといけないとか、そういう問題も生じてくるのだと思うのですが、ハラール性というのを強調し過ぎることの危険性とか、そういうことに関して先生はどういうふうにお考えになっているかという質問です。

(B氏)

最初の質問とちょっと似ているのですが、私の質問は、というか、ムスリムの方々と共存することは重要だと思います。ただ、彼らの宗教的な活動がモスクの中に限定されているならば全然問題ないと思うのですが、ムスリムの人たちというのは、そもそも生き方そのものがムスリムでなければいけないということで、日常生活の中に入ってくるわけですね。

だから、例えば今言ったハラールのものでなければいけない。だから食事も例えば給食と一緒に食べられないとか、あるいは着衣の問題ですけれども、一体スカーフをどこまで認めるのか。例えば学校ではムスリムの女性は一緒に水着を着て泳げるのか。あるいは会社に行くと制服があるときに、そこでもどうしてもムスリムだからスカーフが要るのか。さらには埋葬の問題、ラマダンの問題、たくさんそういうふうな日常生活に関わっているが故にムスリムといえるのですが、そのとき我々日本人は、あるいはノンムスリムの日本人はそ

ういうムスリムの人たちの日常生活の生き方をなるべく受容するようにするべきなのか。例えば礼拝も学校でも認める。別の給食をつくるとか。

でも逆に、日本にいるのだから、彼らがそういうことをもっと妥協してもいいんじゃないの？と。例えば日本に来たらやはり埋葬は土葬でなくて火葬にすべきじゃないの？とか、制服ではスカーフは着けるべきではない、とか、給食はたとえ豚肉が出てもみんな一緒に食べてもいいんじゃないの？とか、そういう要求をすることはできるのでしょうか。それとも完全に彼らの言うことをなるべく聞くようにするのが正しいやり方なのでしょうか。以上です。

(C氏)

私がお伺いしたいのは、日本におけるムスリムの実態調査の研究の中で、イスラム銀行に対する、銀行サービスに対するニーズというのがどれほどあったかということでございます。例えばいろいろところで金利付きのものをしょうがなく使っているというのもあると思いますし、あるいは当座預金とかで無利子にして、利子の受領を回避するとかといったような手段はあると思うのですけれども、皆さん、どうしているのか。

とりわけ、例えばどれだけ実践されているかは別として、ザカートのようなお金の流れですね。そのような宗教的なお金の流れの中でも利子付きの口座を使って取引がなされたりしてしまっているのかというような点についてご教授いただければと思います。場合によってはですけれども、真剣にイスラム銀行をつくってもいいかなというふうに考えておりますので、参考まで、よろしく願いいたします。

(店田氏)

ありがとうございました。最後のCさんのご質問から。まず、調査ではイスラム銀行については全く聞いていませんので、調査結果として、イスラム銀行に対するニーズがどうだったかというのは私どもの調査ではわかりません。というふうなことなのですけれども。

ただ、ザカートについて今お話があったので、例えばザカートを断食明けのお祭り等で、モスクで集めたりしていますけれども、それは普通の銀行を現在は使っています。例えば振り込みでやる場合、普通の銀行を使っています。イスラム銀行があればイスラム銀行を利用するという可能性はあると思いますので、ぜひつくっていただければと思います。そんなところでよろしいでしょうか。

それからハラール。お2人、AさんもBさんもハラールについてだったと思うのですけれども、ハラールについては私よりももっと専門の人がいろいろいるので、私がいろいろなことを言っているのかどうかがあるのですけれども、最初のヤギさんのハラール認証。多分エジプトでは今もハラール認証というのはほとんどないのではないかと思うのですけれども、どこで買ってもハラールだというふうなのがほとんどで、逆にハラールでないもの、例えば

豚肉はここにあるよ、というふうな形で具体的にわかっているという形で、一般的に売られているものはほとんどハラールとは言わずとも、イスラム教徒が一般に口にできるものが流通していると思います。

今ハラールというのが強調されているというふうなことでしたけれども、これについてはイスラム教徒の中からも非常に異論がたくさんあって、ハラールであるかどうかというのを決めるのはそれぞれ個人の問題であって、別にハラール認証機関が「これがハラール」「これはハラールではない」と決めたからということではなくて、自分自身、一人一人のイスラム教徒、ムスリムが決めればいいことではないか、というふうに言うムスリムもいて、また、現在いろいろなところで行われているハラール認証事業に異論を唱える人もたくさんいます。

ですから、強調することについては、私自身もそういったハラールということ強調することはちょっとおかしいのではないかという、私自身の考えとしてはそういった感触を持っておりますし、イスラム教徒の中にも、ムスリムの中にもそういうことを言う人がたくさんいるというのが現状です。

それから、Bさんのほうのご質問は、日常生活の中でさまざまな、イスラム教徒として、ムスリムとしてのいろいろな実践をやる際にそれを日本社会がどう受け入れていくのかということですかね。

先ほど最後に、ムスリムでもイスラムとの向き合い方は多様だ、というふうに言ったのですけれども、その中で、最近ムスリムに関する調査を2018年にやって、いろいろ意識調査をやりました。そういう人たちの中でも、自分はムスリムなのだけれども、ラマダンもやってないし、礼拝もやってないし、あるいは子供に対するイスラム教育もやっていませんよ、というふうなことをはっきり公言するようなイスラム教徒の人もいます。

そういう意味では、子供の給食について自分たちは子供にハラールのお肉を食べさせたいので弁当を持っていきますよ、というふうな形で対応しているイスラム教徒の人たちもたくさんいるというのも確かです。

一方で、最近では学校の中で、どこでしたか、東北のほうで学校給食の中でハラール対応をしているというふうなところがあったのですけれども、それはどういう経緯でそうなったのかというのはちょっとよくわかりません。ですから、全てのイスラム教徒の人がハラール対応を求める、あるいは宗教実践をやるための場を求める、あるいはスカーフをすることを求めるというふうな、全てのイスラム教徒がそれを求めるというふうなことで考えてしまうと、ちょっと違うのかなと思います。

(B氏)

すみません、私の質問は、我々のほうが彼らに対して変容を求めることはできるのですか。あなたたちは日本にいるのだから日本の習慣に沿うべきだ、と。だから、もっと言うならば、例えばフランスのように、学校ではスカーフを着けてはいけませんよ、とか、そういうこと

はいいのでしょうか。

(店田氏)

フランスは法律で、スカーフを着けてはいけませんよ、というふうに決めたわけですよ。それがいいのですか、と。フランスの例は、確かに法律的に着けてはいけないというふうになったわけですが、日本は今のところスカーフを着けるのも着けないのも自由だというふうな形で対応していると思います。特にそこまで宗教的な実践についてやっているわけではありませんけれども、ただ、それについて言うことはできますけれども、それをムスリムに強要することは私はできないと思います。

日本人が、あるいは日本社会がそういった形で、日本のシステムはこうですからこうしてください、と。でも、それをムスリムがどのように解釈してどう対応するかはまた別の話で、例えば学校給食におけるハラールということについて、例えば来たばかりのイスラム教徒の中には、外国からやって来たばかりのムスリムの親の中には、自分の息子あるいは娘は、ハラールしか食べられないから、給食にハラールを提供してください、というふうに要求したりする人たちがいたりします。でも、それに対しては日本の社会は、いや、そんなことはできません、日本では給食はこういう形で提供しているし、もし必要ならば弁当にしてください、ということで、彼らにいわばハラール対応についての変容を求めるというふうな形で対応しています。

ですから、そのほかのところについても我々がいろいろな形で彼らに主張することは当然できますし、それを全くイスラム教徒の側が聞かずに、全く自分たちの主張だけを繰り返すということにはならないというふうに考えています。いろいろな例はまだあったかと思うのですが、取りあえずハラールについてはそのようなところがあります。

あるイスラム教徒の人が、これはだいぶ前の話になりますけれども、「郷に入っては郷に従え」ということわざといいますか、言葉を使って、我々は日本に住んでいるのだから、「郷に入っては郷に従え」、と。全てを日本のやり方に合わせるわけではないけれども、かなりのところまでは日本の社会の制度、そういうものを尊重しながら暮らしていくんだ、というふうな言い方をしたことがあります。ちょっとご参考までに申し上げました。

(D氏)

1点だけ伺いたいのですが、例えばインド人学校ができたり、ネパール人のエベレストインターナショナルスクールができたりしていますけれども、イスラム学校の建設運動はあるけれども、なかなかまだできないということなのですが、例えばオーストリアのシドニーなどに行くと、非常にレベルの高い、学力レベルの高いイスラム学校があって、結構日本人ムスリムとバングラデシュのカップルの子供などが行っているのです。日本ではそういう海外の動きを見て、ムスリムの人たちが学校をつくりたいというのがあるのだろう

とは思うのですけれども、どの程度の盛り上がりがあるのか、今後の見通しがあったらちょっと教えていただきたいです。

(店田氏)

先ほどちょっと情報不足のような感じで言ってしまいましたけれども、一応、大塚モスクがインターナショナル・イスラミーヤ・スクールというのをつくって、今、確か小学校の3年生ぐらいまでは全日制という形でインターナショナルスクールが機能しているそうです。ただ、経営的にそれがうまくいくのかというと、やはり入ってくる子供の数が少ないために、将来的にそれが6年生まで、あるいは中学校まで機能するようなインターナショナルスクールとして動いていくかどうかというのはちょっと今のところわからないと。でも、大塚の例、あるいは東京ジャーミイの近くにある友愛インターナショナルスクールとか、幾つかそういう試みがあって、ちょっと今うまく言葉が出ませんが、イギリスのカリキュラムに沿った教育システムを使ってやろうというふうに動いています。

(E氏)

本日の講演の中でもありましたように、日本人のムスリムの方々に対する印象として、「過激」とか「攻撃的」という印象があるということでしたけれども、その一つの要因として考えられるのが、イスラムの中にいろいろな宗派があると思うのです。先ほどもスンニ派とシーア派とかと出ていたと思うのですけれども、日本にモスクが100個以上ということで、日本国内でも宗派同士の対立とかそういうことというのは実際あるのでしょうか、というのを伺いたいです。ありがとうございます。

(店田氏)

日本には例えばイラン人の人たちがシーア派ということで、シーア派の人もある一定程度、ほかの国の国籍の人でもシーアの人がいったりするのですけれども、そういうことについて聞いたりいろいろな調査や会議の場で聞いたりもしたりしたことがあります。例えば「スンニ派のモスクにシーア派の人が来たら拒絶するのですか」というふうに聞くと、「いや、別にシーア派の人が来て一緒にお祈りをして全然問題ないよ」というふうな形で、普段は別に争い事といますか、けんかをしているというふうな状況は全くないというふうに聞いています。

ただ逆に、最近聞いたといますか、そういう宗派の問題ではなくて、ムスリムの間でモスクのリーダーシップをめぐるいろいろなけんかが起こったとか、それはシーア派、スンニ派には関係ないのですけれども、そういったことを聞くことはあつたりします。ただ、宗派によって日本国内で何か大きなもめ事があつたりとか、そういうことは聞いたことはありません。

(F氏)

私が質問したいのは、大学内でのムスリムの方々の在り方の先生の考える理想型みたいなものをお聞きしたくて、私の大学では礼拝所が学校の校舎の隅のほうにあったりとかするのですが、そういう礼拝所の学内での在り方ですとか、学生への認知ですとか、もしくは学内で留学生としていらっしゃるそういうムスリムの方々の認知のためにシンポジウムを開催したり、食事をきっかけとした交流などをしたりすることもできるのかなと思うのですが、先生は、大学という学生の交流の場があるところの中でどのような理想型があるとお考えでしょうか。

(店田氏)

交流の場の在り方の理想型ということですか。それは、場の性格とか？ どういうふうに答えればいいのかうまく理解できないのですけれども、交流の場を設定する、例えば F さんが考える交流の場の理想的な在り方、一つの例としてどんなものがあるのでしょうか。

(F氏)

私は、私の学校でも実際にやろうとしていることなのですけれども、ムスリムの方で、講演というかお話とかをしてもいいよ、と言ってくくださる方とかにイスラムに関するお話をしていただくとか、学食で、これはイスラム文化圏の料理です、とかというふうに紹介をしたり。

(店田氏)

わかりました。そういった、私が最後に述べたようないろいろなきっかけとか出会う場をつくるとか、あるいは交流のイベントを持つとか、そういうことを含めて理想的なものは何か、特に大学において、ということですよ。

(F氏)

そうです。

(店田氏)

今 F さん自身がおっしゃったように、例えば大学の食堂の中でハラルメニューを、ハラルメニューといっても別に普通に日本人が食べられるものですし、そういうものを提供するとか、あるいはムスリムの学生と一般の学生がトークセッションをやるような、そういったものであったりとか、あとは協働して何かを、例えば私は研究者の立場なのであれなのですけれども、一緒に調査をするとか研究をするとか、そういうこともあっていいのかなというふうに思います。単に娯楽的といいますか、面白いものとかそういうことだ

けではなくて、一緒に勉強する機会を設けるとか、そういうこともあっていいし。

あるいは最近女性であるとヒジャーブという、わかりますよね、ヒジャーブというスカーフのようなもの、あれについても最近ネット上では日本人の若い女性の第2世代の人たちがいろいろな形で発信をしていますけれども、そういうファッションとしてのもを取り上げて交流の機会を持つとか、そういうことも大学生あるいは学生というところではいいのかなというふうに思いますので、あまり堅くならないようなそういうファッションとか食とか。

それを言うと、よく3F——ファッション・フード・フェスティバルという、いかにも、というふうな言い方をいろいろな研究者が批判的に使ったりするのですが、そういうものもうまく利用しながら、まず進めていくというのが一つのきっかけになるのかなというふうに思います。

(G氏)

一枚岩ではないという話のところで、イスラム圏の国々は非常に政治的に不安定な国が多いし、紛争が続いている国も多いわけですが、例えば本国の政治的な不安定あるいは政変が起きたりしたときに、日本のこのムスリムのその国の人たちというのはどのような影響を受けているのか。例えば政変が起きたら、本国からの指示によって、日本で暮らしているムスリムの方がいろいろ仕事がしづらくなるということもあるでしょうし、そういった本国と日本の社会との、本国で起きていることの影響というのはどの程度日本での生活に生じているのか。

そういった点では、例えば先ほど宗派の話がありましたけれども、宗派というよりも、むしろ同じ国でも民族によって対立が起きている国もありますよね。それで今、大使館の前でよく小競り合いが起きていたりしている。あるいは紛争によって政府の支持者と反政府の支持者、日本でもそうした人たちの間で溝ができていくわけですが、そういった分裂したムスリムの社会に対して日本の私たちはどのように向き合うのかと。そこで共生というのも非常に難しくなってくると思うのですが、本国の日本のムスリムへの影響、あるいはそうした人たちとどのように共生を進めていくのか。

本国の対立というのは、私たち日本に住んでいる例えばシリアの人たちが反政府側なのか政府側なのか、知らないで付き合いなくてはいけないこともあるわけですよね。そうしたときの共生の難しさというのはどのように考えておられますか。

(店田氏)

難しいですね。「難しい」としか言いようがないというか(笑)。

確かにシリアの政府・反政府側、あるいはクルド人の人たちの問題であったり、あるいは同胞団系の人々がエジプトからやって来たとか、いろいろなことがあると思うのですが、

も、共生しなければいけない、と。先ほど私が言おうとした「共生」というのは、全ての人
が共生という、我々、単に隣人として一緒に仲良く暮らしましょうというのが共生だ、と言
う人もいますし、あるいは、もっと互いの尊厳とか価値観を認め合って、一緒に空間を共有
すれば共生なのだ、というふうな。

だから「共生」自体が非常にわかりづらい、あいまいな言葉でもありますので、そういう
ものまでも共生だというふうに考えるとすると、別に本国の状況がどうであれ、我々はそれ
について知ることもあるでしょうし、逆に、そういう情報を持たないまま一緒に暮らすとい
うこともあり得ると思うので、何て言うのでしょうかね……。

恐らく G さんのほうがその辺はいろいろ考えていらっしゃって、こういうもの、こうい
う状況が、ということがあるのだと思うのですけれども、どのようにお答えすればいいのか、
ちょっと今すぐには思い付かないというのが私の正直なところですが、もう一度ゆ
っくり考えさせてもらえればご回答できるかと思います。

(司会) ご質問くださった皆様、ありがとうございます。それでは、お時間となりました
ので、これをもちまして本日の講演会を終了させていただきます。店田先生にいま一度盛
大な拍手をお送りください。

(店田氏) ありがとうございます。(拍手)

——以上——